

## 【論 文】

# カウフマン著『ユートピア』へのマルクスの助言

橋 本 直 樹

## 目 次

はじめに

### I マルクスが助言することになった経緯

1. アンドレアスの書誌における言及
2. 二通のカウフマン宛マルクス書簡
  - (1) ペツラーの仲介
  - (2) マルクスの第一の手紙 (1878年10月3日付)
  - (3) マルクスの第二の手紙 (1878年10月10日付)

### II マルクスの助言はどのように生かされたのか

1. マルクスの直接の訂正指示
  - (1) ラサールの抹消
  - (2) 『資本論』「ロシア語」訳の追補
  - (3) メーリングについての記述の正確化
2. 論説「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」の送付による訂正
  - (1) 雑誌 No. 1407掲載稿末尾の注記の変更
  - (2) インタナショナル第1回大会についての叙述の正確化
  - (3) 新たな脚注による新資料の追加

### III 「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」の異文

### IV 『共産党宣言』からの引用

- (1) カウフマンによる英訳
- (2) 英訳箇所に関わる諸問題

おわりに

## は じ め に

M. カウフマン<sup>1</sup>の著作『諸ユートウピア；あ

るいは社会改良の諸計画。サー・トマス・モア  
からカール・マルクスまで』が1879年にロンド  
ンで公開された<sup>2</sup>。前年の『レジャー・アワー

<sup>1</sup> モーリッツ・カウフマン (Kaufmann, Moritz [1839-1914以後]) は、『マルクス・エンゲルス著作集 (MEW)』第34巻の人名索引によれば、イギリスの聖職者であって、社会主義的教説にかんするいくつかの書物がある。1874年に、Albert E. F. Schäffle の著作 *Kapitalismus und Socialismus* に基いて、*Socialism: its nature, its dangers, and its remedies considered* を出版している。

<sup>2</sup> *Utopias; or, Schemes of social improvement. From Sir Thomas More to Karl Marx*. London, C. Kegan Paul & Co., I, Paternoster Square. [Charles Dickens and Evans, Crystal Palace Press], 1879, in-16, xii-267p. なお、Utopia の発音は、本来のラテン語ではウトウピア、英語読みではユートウピアと記すのが長音・アクセントともほぼ近いカタカナ表記なのであろう。が、本論文の表題および以下の本文では、すでに一般化してしまっていると思われるユートピアを用い、また著作表題での複数を示す「諸」は省くこととする。

(The Leisure Hour)』誌連載稿がまとめられたのである。

目次は次のようである。〔( ) 内の前の数字が雑誌に掲載された際のページ数[ローマ数字は1ページに2欄あるその欄数], それに続く数字が著作のページ数。〕

- I. モアの『ユートピア』(pp. 134/I-136/II; pp. 1-13)
- II. ベーコンの『ニュー・アトランティス』  
およびカンパネッラの『太陽の都』(pp. 245/II-248/II; pp. 14-30)
- III. モレリの『バジリアッド』とバブーフの『平等者の結社』(pp. 293/II-296/II; pp. 31-48)
- IV. サン・シモンとサン・シモン主義 (pp. 349/I-352/II; pp. 49-66)
- V. フーリエとファランステール (pp. 436/I-440/II; pp. 67-87)
- VI. ロバート・オウエンとイギリス社会主義 (pp. 524/I-528/I; pp. 88-109)
- VII. マルローとドイツにおける協同社会主義 (pp. 558/I-560/I; pp. 110-122)
- VIII. カベールの『イカリア旅行記』(pp. 602/I-605/II; pp. 123-142)
- IX. ルイ・ブランの『労働の組織』(pp. 652/I-655/I; pp. 143-158)
- X. プルドンの批判的社会主義(pp. 681/I-684/II; pp. 159-174)

- XI. ラサールとドイツ社会主義 (pp. 715/I-719/II; pp. 175-196)
- XII. ラサールとドイツ社会民主党 (pp. 746/I-750/II; pp. 197-223)
- XIII. カール・マルクスと最近の社会主義理論 (pp. 788/I-792/II; pp. 224-241)
- XIV. カール・マルクスとインタナショナル (pp. 821/II-825/I; pp. 242-267)<sup>3</sup>

見られるとおり末尾のXIIIとXIVの二つの章でマルクスが取り上げられている。他の章については、雑誌と著作とはほぼ同じ内容であるが、この最後の二つの章にのみ多少の改変が見られる。

この著作は、マルクスがイギリス国内においてドイツ社会主義との関連の中で知られることになる事例の一つとされる<sup>4</sup>。とりわけ本書が興味深いのは、前年の1878年10月にこの二章分の校正刷をカウフマンがマルクスに送り、その助言を求めていることであって、本稿で扱う所以である。

マルクスは、もっぱら事実認識の誤りのみを指摘し、校正刷に訂正を施して返送した。それだけでなく、マルクスはその返信に、同年の『セキュラー・クロニクル』誌8月号に発表した彼の論文「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」<sup>5</sup>を同封した。カウフマンが、第一インタナショナルについて述べる際に、ハ

<sup>3</sup> 著作の第XIV章の冒頭4ページ分強の242-246ページは、雑誌連載時は第XIV章ではなく、それに先立つ第XIII章の末尾を成していた。

<sup>4</sup> Willis, Kirk, The introduction and critical reception of Marxist thought in Britain, 1850-1900, *The Historical Journal*, 20, 2 (1977), p. 428, footnote 47.

<sup>5</sup> Karl Marx: Mr. George Howell's History of the International Working-Men's Association, *MEGA*<sup>2</sup> 1/25, S. 151-157 u. S. 720-731[Apparat]. 初出は、*The Secular Chronicle, And Record of Freethought Progress*, London. vol. X, No. 5, Sunday, August 4th, 1878. pp. 49-51.

ウエルの論説<sup>6</sup>に依拠していたためである。このハウエルの叙述は事実誤認と歪曲のきわめて多いものであった。そのためマルクスは直ちにそれを正す論文を執筆し、上掲誌に掲載したのである。その論文をマルクスが同封したのは、カウフマンがそれを読み、自ら叙述を改めるのに資するであろうことを期待したものと思われる。

マルクスの諸著作の普及史・受容史という観点に立つと、カウフマンの著作にマルクスの助言がどのように生かされたのかを吟味して見る必要が生じる。

最初に、マルクスがカウフマンに助言した経緯をたどり、引き続いて、吟味の作業に移る。

## I マルクスが助言することになった経緯

### 1. アンドレアスの書誌における言及

カウフマンの著作『ユートピア』への言及はすでにベルト・アンドレアスの書誌『マルクスおよびエンゲルスの共産党宣言。歴史および書誌。1848-1918年』の第118番に見出される。

「本書[カウフマンの著作のこと一橋本]は、著者の連載論説を著作としたものである。マルクスは、二つの章、「カール・マルクスと最近の社会主義理論」(224-241ページ)および「カール・マルクスとインタナショナル」(242-267ページ)の歴史および伝記の一部を、

訂正した。(第113番の注6を参照せよ。)」<sup>7</sup>

アンドレアスが( )内で参照指示している第113番では、カウフマンの『レジャー・アワー』連載論説における『共産党宣言』からの引用が取り上げられている。その脚注6にはカウフマンの著作の247ページの一節が引用されている。アンドレアスが省略した箇所をも補って示せば次のようである。

「この修正を著者はカール・マルクス氏に負っている。氏は、著者とはまったく見ず知らずでありながら、また本書において述べられている諸見解の反対者でありながら、親切にも本章および前章の伝記的部分および歴史的部分の誤りを正す労をとってくれた。」<sup>8</sup>

本稿でマルクスの助言と表現しているのは、彼がこの労をとったことを指す。本節では、以下、この助言に至る経緯および助言の内容を確認する。

### 2. 二通のカウフマン宛マルクス書簡

#### (1) ペツラーの仲介

マルクスがカウフマンに助言することになるそもそものきっかけとなったのは、ペツラーが、9月23日に、カウフマンの手紙を持参してマルクスを訪問し、カウフマンの要請を仲介したことにあつた<sup>9</sup>。

仲介者のペツラーについて、マルクスとエンゲルスの往復書簡で見ると、それまでに5通の

<sup>6</sup> George Howell, The History of the International Association, *The Nineteenth Century. A Monthly Review*, vol. IV, July 1878, pp. 19-39.

<sup>7</sup> Andréas, Bert: *Le Manifeste Communiste de Marx et Engels. Histoire et Bibliographie 1848-1918*, Milano 1963, p. 84.

<sup>8</sup> Andréas, *ibid.*, No. 113, note 6, p. 82; Kaufmann, *Utopias*, p. 247, footnote.

<sup>9</sup> 1878年9月24日付エンゲルス宛マルクスの手紙にはこうある。「きのうは老ペツラーがある牧師の手紙を持ってここにきた。この牧師は雑誌を一つ出しており、社会主義にも手をつこんでいて、僕からもなにか知識を得たいということだった。」(MEW, Bd. 34, S. 88. 訳文は大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』第34巻所収の岡崎次郎訳による。)

手紙で言及されている。それらから見ると、1848年革命後ロンドンに亡命したドイツ人たちのなかでマルクスおよびエンゲルスとは思想的・運動的に異なる立場に立っていたが、国際労働者協会の運動のなかでマンチェスターの労働者たちと多くの繋がりをもっていたことから、マルクスおよびエンゲルスらとの連絡をとるようになった人物であることが分かる<sup>10</sup>。

## （２）マルクスの第一の手紙（1878年10月3日付）

このようなベツラーの介在したカウフマンからの要請に応じて、マルクスは10日後にカウフマンに宛てて手紙を書いた。この手紙は、次のような英文の草案だけが残されている。

「拝啓

ベツラー氏の話によると、貴下は拙著『資本論』と小生の生涯について論文をお書きになり、それが貴下の他の論文といっしょに印刷されるとの由。そして貴下は小生またはエンゲルスが、貴下の側に何かの間違いがあったら、それを訂正することを望んでおられるとの由。当該論文の写し（a copy of [the] said article）を拝見しないうちは、そのことがどの程度までできるか、もちろん決定いたしか

ねます。

コミュニンの最良の歴史書はリサガレの『コミュニン史』です。とはいえ、初版は売り切れで、第二版はまだ出版されていません。リサガレの宛先は、ロンドン、西区、フィッツロイ・スクウェア、フィッツロイ・ストリート、35番です。ひょっとしたら彼が自著の版本を工面できるかもしれません。

さしあたりコミュニンにかんする『呼びかけ』をお送りします。コミュニン没落の直後に、インタナショナル総評議会にかわって、小生が書いたものです。

また——もし貴下がまだお持ちでなかったら——小生の友人エンゲルスの最近の著作『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』を郵送いたしましょう。これはドイツ社会主義を評価するのにたいへん重要なものです。

敬具

カール・マルクス

M. カウフマン殿<sup>11</sup>

マルクスのこの手紙の趣旨は「当該論文の写し」を読まないことには要請にどの程度応えられるか分からないということである<sup>12</sup>。その他に、資料の紹介として、リサガレの著作の推薦

<sup>10</sup> Andréas, *ibid.*, p. 81, note 2. アンドレアスによれば、ベツラーはこの2年前には匿名で社会改革にかんする著作を出版している。[Petzler, J. A.] *Social Architecture; or, Reason and Means for the Demolition and Reconstruction of the Social Edifice*. By an Exile from France. London, Samuel Tinsley, 10, Southampton Street, Strand, 1876, in-8, xix-[1]-439p (Andréas, *ibid.*, p. 87, note 1; pp. 87/88) である。マルクスおよびエンゲルスがベツラーに言及しているのは、アンドレアスも指示している1851年8月25日付エンゲルス宛マルクスの手紙 (MEW, Bd. 27, S. 320) が最初であり、その後、いくつかの書簡で言及されている (*Ibid.*, Bd. 28, S. 330; Bd. 31, S. 33, S. 74, S. 79)。

<sup>11</sup> 「1878年10月3日付モーリッツ・カウフマン（在バーケンヘッド）宛マルクスの手紙（草稿[原英文]）」*Karl Marx / Frederick Engels Collected Works*, vol. 45, Moscow 1991, pp. 333/334. 邦訳は大月書店版『全集』第34巻所収、川口浩 訳。

<sup>12</sup> この手紙にはおそらくコミュニンにかんする『呼びかけ』、すなわち現在は『フランスにおける内乱』と称されているマルクスの著述も同封されたのであろうことが窺われる。が、手紙で触れられているエンゲルスの著作『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』は、以下で述べるように、10月11日までにもまだ郵送されていなかったようである。

と、自身のコミュニンにかんする『呼びかけ』すなわち現在では『フランスにおける内乱』と称されているマルクスの著述およびエンゲルスの新著『反デューリング論』の郵送について記されている。

この手紙を受け取ったカウフマンからは、折り返し、彼の論説および著作の4つの校正刷が添えられた手紙が届く。

(3) マルクスの第二の手紙(1878年10月10日付)

カウフマンから届いた手紙に対して、マルクスの返信が書き送られる。1878年10月10日付の次の英文草案だけが残されている。

「1878年10月10日、ロンドン、北西区、  
メートランド・パーク・ロード、41番  
拝啓

校正刷のなかで一、二箇所の誤りを指摘するのにとどめました。もっと重要な誤記に立ち入るのには、余暇がありませんし、またそうすることは貴下の目的にそわないでしょうから。

校正刷 b

「そのうちのひとは青年ラサルであった(one of whom was the youthful Lassalle)」を抹消しました。彼は、当時最初に小生と個人的関係に入った人ではありますが、『新ライン新聞』の同僚ではけっしてありませんでした。

『資本論』の「ロシア語(the Russian)」訳を追補しました。若い大学教授が小生の理論を公然と採用し弁護したのはまさにロシアにおいてだったからです。

校正刷 d

「そして以前はそのメンバーのひとり(and formerly one of its members)」を抹消しまし

た。メーリングはドイツ社会民主党のメンバーではけっしてありませんでした。事實は、御用新聞基金管理者の数回の策動をリープクネヒトに通報することによって、メンバーになろうと試みたということです。その後まもなく、ゾネマン氏(『フランクフルト新聞』の所有者)を相手どった名誉棄損訴訟のうちに、フランクフルト法廷の判決で表立って破廉恥の汚名を着せられると、彼は恐れげもなくやぐざ文士という地位を容認しました。ドイツ社会民主党の生粋の敵対者中の最も保守的な者でさえ、こういう人が「社会民主党の歴史家」と呼ばれるのを知ったら、むしろびっくりさせられるでしょう。彼がバンベルガー氏の尊敬を受けていることはもちろんです。そのバンベルガー氏たるや、1848年のドイツ革命の敗北後(彼はこの革命の期間中滔々とまくしたてるデマゴークの役割を演じていました)、パリ在住の亡命者として第二帝政の財政家たちから実務的訓練を受け、メキシコ借款詐欺等への参加によって財を成し、プロイセンの戦勝後ドイツへ帰還し、ドイツの「株式・泡沫会社詐欺期」の指導的人物のひとりになった男です。たとえばオーエンの運動の資料および批判の件で話しかけてもよい相手は、絶対にロンドンのアルベルト・グラント氏ではありません(彼はバンベルガー風の男で、奇しくも同じ町——マインツ——の出身です)。

ハウエル氏の論文(『ナインティーンス・センチュリ』所載)をどの程度まで「歴史的資料」と見なしてよろしいかは、この手紙と一緒にお送りした印刷物からお分りになります。

明日エンゲルス氏の著作をお送りしましよ

う。」<sup>13</sup>

マルクスは校正刷について、ラサールとメーリングに関わる二つの抹消および『資本論』ロシア語訳の付加を勧めている。また、ハウエルを批判する「印刷物」を同封したこと、前便において送ると記していたエンゲルスの『反デュリング論』はこの時点ではまだ送られていなかったこと、が分かる。同封した「印刷物」とは、後論において詳しく見るが、マルクスが1878年に『セキュラー・クロニクル』誌8月号に発表した論説「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」のことである<sup>14</sup>。

マルクスは校正刷としてbとdと二つに触れているだけである。アルファベットの略号から、カウフマンがマルクスに送った校正刷には、他に校正刷aと校正刷cとがあり、校正刷は全部でa, b, c, dの4種があったのであろうことが推測される。おそらく校正刷aは『レジャ

アー・アワー』第1407号のもの、校正刷bは予定されていた著作のほぼこの連載部分に対応する第XIII章のもの、校正刷cは『レジャアー・アワー』第1409号に収録された連載最後のもの、そして校正刷dが著作のうち、ほぼこの連載部分に対応する第XIV章のものであったと見てよい<sup>15</sup>。カウフマンは『レジャアー・アワー』連載稿を著作にするべくすでにその校正刷も作成していたものと思われる。マルクスは、その著作となる方の第XIII章の校正刷bと第XIV章の校正刷dとに訂正の助言をしたことになる<sup>16</sup>。

## II マルクスの助言はどのように生かされたのか

カウフマンの著作について、雑誌掲載論説と著作とを比較することにより、マルクスの助言がどの程度生かされたのかが分かる。本節では

<sup>13</sup> 「1878年10月10日付モーリッツ・カウフマン（在バーケンヘッド）宛マルクスの手紙（草稿[原文]）」*Collected Works*, vol. 45, pp. 334/335. 邦訳は同前『全集』所収、川口訳。下線は橋本による。なお、以下、本稿における引用文中の下線は、特に断らない限り、橋本による。

<sup>14</sup> 『マルクス・エンゲルス著作集』第34巻の注記においてはこう述べられている。「マルクスがモーリッツ・カウフマンに彼の論文「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」を送ったことは明らかである。この論文は、1878年に『ナインティーンズ・センチュリ』誌7月号に発表された変節者ハウエルの論文「国際協会の歴史」を反駁したものである。ハウエルは国際労働者協会の歴史を歪曲した。彼の論文は国際労働者協会ならびにその設立・発展のさいのマルクスの役割にかんする虚偽の主張をその内容としていた。」（*MEW*, Bd. 34, Anm. 455. 同前、川口訳。）

<sup>15</sup> そうであるとすれば、校正刷aと校正刷b、校正刷cと校正刷dそれぞれの違いはもっぱら区分されている箇所が違うだけで、内容は同一のものなのであった。したがって、マルクスは雑誌の校正刷aとcには触れることなく、著作の校正刷であるbおよびdにのみ言及したのであろう。『レジャアー・アワー』が早くに発行されていれば、そのいわば抜刷（別刷）を送付できたのだが、いずれも12月発行の号であったためにまだ発行されておらず、掲載稿にもっとも近い校了となった校正刷あるいはいわゆる清刷が同封されたものであろう。

<sup>16</sup> そうであるとすれば、マルクスの助言は雑誌論説には反映されておらず、助言を得て「いくらか書き直され」たのは、雑誌ではなくて、著書の方のみであったわけである。マルクスの助言は雑誌掲載稿の訂正には時間的に間に合わなかったのではなかろうか。したがって、『マルクス・エンゲルス著作集』の次の注記の下線部は改められる必要がある。「イギリスの聖職者、モーリッツ・カウフマンは、彼が計画していた社会主義の歴史にかんする著書のために彼が書いたマルクスにかんする一論文に目を通すことを、かねてからマルクスに依頼していた。マルクスはこの依頼に応じた。1878年12月にカウフマンの論文はいくらか書き直されて雑誌『レジャアー・アワー』に掲載された。マルクスが最後の二章に目を通した著書は1879年にロンドンで『ユートピア。または社会改良計画。サー・トマス・モアからカール・マルクスまで』という表題で発行された。」（*MEW*, Bd. 34, Anm. 172. 同前、岡崎訳。）



これを確認する。双方を比較する便宜のために以下ではいずれも英語原文を掲げるが、著作における変更については注記等で最小限の掲出に留めることとする。

### 1. マルクスの直接の訂正指示

手紙においてマルクスが誤りであると直接に指摘した部分は、カウフマンによってどのように処理されたのであろうか。

#### (1) ラサールの抹消

まず、ラサールを抹消した箇所を見よう。それは、1848年とそれに続く時期のマルクスの伝記的事実について叙述している部分にある。

雑誌掲載分では次のようである。

He was expelled from Brussels during the revolutionary panic of 1848, and though invited to Paris by the Provisional Government, found it soon advisable to quit France and to return to Cologne, where, in conjunction with friends, one of whom was the youthful Lassalle, he founded a new *Rheinische Zeitung*, which became the organ of the Revolution.<sup>17</sup>

カウフマンは、マルクスの助言を承けて、著作では、friends、の後の下線部「そのうちのひとりとは青年ラサールであった」という一句を削除している<sup>18</sup>。

#### (2) 『資本論』「ロシア語」訳の追補

次に、マルクスが『資本論』「ロシア語」訳を補った箇所はどのように処理されたのであろうか。

雑誌掲載分では次のようである。

It received further expansion in Karl Marx's *magnum opus*, "Das Kapital" (Capital), a second edition of which, published in 1872, enjoys a large circulation, has been translated into French, and forms the text-book of Modern Socialism.<sup>19</sup>

『『資本論』の「ロシア語」訳を追補』したというマルクスの助言を承けて、著作では、下線部の French とコンマとの間に and Russian の 2 語が挿入されているのを見ることができる<sup>20</sup>。

#### (3) メーリングについての記述の正確化

メーリングについてのマルクスの指摘はどのように扱われたのであろうか。

雑誌掲載分では次のようである。

These internal divisions weakened the party and presented it in an unfavourable light before the world at large. Marx, although by reason of his intellectual superiority the natural head of the movement, was unwilling to become its acknowledged leader, and a small number of *rois fainéants* succeeded each other, from Becker, the immediate successor of Lassalle, styling himself the "President of Humanity," downwards, until Baron von Schwezer, a really able man, at last succeeded, in 1867, to supplant the lesser lights of the association in the presidential chair. "Then," says Mehring, the historian of the Social Democracy, and formerly one of its members, "the modern Alexander (*i.e.* Lassalle), who had gone out to conquer a new

<sup>17</sup> *The Leisure Hour*, p. 789/II.

<sup>18</sup> one of whom was the youthful Lassalle, > 削除 (Kaufmann, *ibid.*, p. 230. 4)

<sup>19</sup> *The Leisure Hour*, p. 789/II.

<sup>20</sup> French, and forms > French and Russian, and forms (Kaufmann, *ibid.*, p. 230. 12.)

world of bliss, had found at last the one most worthy to become his successor.”<sup>21</sup>

著作では、シュヴァイツァーの綴字の誤植訂正、綴字法の多少の相違のある他は、マルクスの助言を承けて、Mehring に続く下線部12語が削除されている。つまり、マルクスが手紙で校正刷から抹消したと述べていた「そして以前はそのメンバーのひとり」という6語が、著作でも実際に削除された。それだけでなく、さらに、Mehring の直後の「社会民主党の歴史家」という6語も削除された<sup>22</sup>。これは、マルクスの手紙に記された「こういう人が「社会民主党の歴史家」と呼ばれるのを知ったら、むしろびっくりさせられるでしょう」との感想をカウフマンが尊重した結果とみてよい。<sup>23</sup>

以上の3点がマルクスの直接に指示した箇所であり、それはカウフマンによってすべて受け容れられ、採用され、著作にそのまま生かされたことが分かる。

マルクスは返信に、さらに自身の『セキュラー・クロニクル』誌8月号掲載論説「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」を同封した。カウフマンはこの論説を読み、訂正を要する箇所を自ら訂正している。次にこれらの訂正箇所を項を改めて確認しよう。

## 2. 論説「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」の送付による訂正

マルクスが同封した論説はカウフマンによってどのように利用されたのか。まず、雑誌連載最終回に先立つ回の論説最後に脚注が付されていたが、この注記が増補されている。この点から見よう。

### (1) 雑誌 No.1407掲載稿末尾の注記の変更

#### 1) ハウエル論説の評価の変更

カウフマンは、雑誌の掲載稿の末尾に、ハウエル論文に言及した脚注を置いていた。その冒頭で、ハウエルの論説を「有益な論説(a valuable article)」と紹介していた(No. 1407, p. 792/II, footnote)。ところが、著作のそれに対応する箇所では、「有益な(valuable)」という形容詞が削除され、ただ単に「論説(an article)」に変更されている(p. 246, footnote)。この1語の削除は、マルクスの論文によるハウエル論文の批判を尊重した態度である。

#### 2) 注記後半部への二段落の追加

同じ脚注に著作では次の二つの段落が追加された。

Karl Marx, in “The Secular Chronicle,” 20th August, 1878, referring to this article in “The Nineteenth Century,” complains that Mr. Howell does not mention him as present at the “foundation meeting” of the International, where he was chosen a member of the Provisional General Council, and soon after drew up the “inaugural address” and the general statements of the Association, first issued in London in 1864, and

<sup>21</sup> *The Leisure Hour*, p. 791/II.

<sup>22</sup> the historian of the Social Democracy, and formerly one of its members, > 削除 (Kaufmann, *ibid.*, p. 243. 14.)

<sup>23</sup> ちなみに、このメーリングに関わる訂正箇所は、前の2件が校正刷bであるのに対して、マルクスの手紙に見られるように校正刷dをもとにしての助言である。この点が、これら二つの校正刷が、雑誌論説のものではなくて、著作の第XIII章と第XIV章の校正刷に当たるといふ推測の根拠になる。雑誌連載の方はこのメーリングの箇所も前の二カ所と同じく、No. 1407所収部分に含まれており、もしマルクスが雑誌の校正刷を用いた場合には、前の2件とこの箇所は同じ校正刷に基づいて助言することになるはずだからである。



confirmed by the Geneva Congress of 1866.

The author is indebted for this correction to Mr. Karl Marx, who, although a perfect stranger and an opponent to the views set forth in this volume, has been kind enough to correct the biographical and historical portions of this and the previous chapter.<sup>24</sup>

追加された一つ目の段落は、以下に引用する『セキュラー・クロニクル』誌掲載のマルクス論説の第二段落を基に、正確な事実を紹介したものである。すなわち、

Mr. Howell sets about his “History” by passing by the facts that, on September 28th, 1864, I was present at the foundation-meeting of the International, was there chosen a member of the provisional General Council, and soon after drew up the “Inaugural Address,” and the “General Statutes” of the Association, first issued at London in 1864, then confirmed by the Geneva Congress of 1866. (ハウエル君は、1864年9月28日に私がインタナショナルの創立大会に参加し、その席上で臨時総評議会の一員に選出され、その後まもなく協会の『創立宣言』と『一般規約』——最初1864年にロンドンで公表され、ついで1866年のジュネーヴ大会によって確認されたもの——を起草したという事実をとばすことで、彼の「歴史」を始めている。)<sup>25</sup>

マルクスの論説の送付を受けて、カウフマンの事実認識が正確にされたことになる。

また、追加された2つの段落のうち後のもの

は、アンドレアスの言及した、カウフマンがマルクスに対して表明した謝意の箇所であり、本稿で先に訳出しておいたところである。

## (2) インタナショナル第1回大会についての 叙述の正確化

インタナショナルの活動について、ハウエルの論説に基づいて「第1回大会」であると誤った事実を記載していた箇所が、マルクスの指摘によって正確にされた。

雑誌では次のよう。

The first annual congress was held in 1865, and delegates from several European countries appeared on the occasion.<sup>26</sup>

著作ではこうである。

In 1865 delegates from several European countries met in London, for the purpose of conferring with the General Council on the programme of the “first Congress,” which was to assemble at Geneva, in September, 1866.<sup>27</sup>

この変更は、ハウエルの歪曲をマルクスの論説が次のように批判した箇所に従った正確化である。

In the first instance, no “Congress” of the International took place in September, 1865. A few delegates from the main continental branches of the Association met at London for the sole purpose of conferring with the General Council on the Programme of the “First Congress,” which was to assemble at Geneva, in September, 1866. (まず第一に、1865年9月には、インタナショナルの「大会」はひらかれなかった。大陸に

<sup>24</sup> Kaufmann, *ibid.*, p. 247, footnote.

<sup>25</sup> MEGA<sup>2</sup> I/25, S. 15 (邦訳は大月書店版『全集』第19巻所収、村田陽一訳)。

<sup>26</sup> *The Leisure Hour*, No. 1409, p. 821/II.

<sup>27</sup> Kaufmann, *ibid.*, p. 246/247.

おける協会の主要な諸支部から来た少数の代議員がロンドンで会合をひらいたが、その唯一の目的は、1866年9月にジュネーヴでひられるはずであった「第1回大会」の議案について総評議会と協議することであった。<sup>28</sup>

### (3) 新たな脚注による新資料の追加

カウフマンは、著作において新たに次のような脚注を付した。

The programme is characterised by the French historian Henri Martin, in a letter to *The Siècle*, as follows: “The breadth of view and the high moral, political, and economical conceptions which have decided the choice of questions composing the programme of the International Congress of working-men, which is to assemble next year, will strike with a common sympathy all friends of progress, justice, and liberty in Europe.”<sup>29</sup>

これはマルクスの論説が次のように紹介した章句そのままである。

Like the other representatives of the General Council, I had to secure the acceptance by the Conference of our own programme, on its publication thus characterized, in a letter to the Siècle, by the French historian, Henri Martin:

“The breadth of view and the high moral, political, and economical conceptions which have decide the choice of questions composing the programme of the International Congresse of Workingmen, which is to assemble next

year, will strike with a common sympathy all friends of progress, justice, and liberty in Europe.” (中央評議会の他の代表たちと同様に、私は、自分たちの議案を協議会に承認してもらうために努めなければならなかった。この議案が公表されたとき、フランスの歴史家アンリ・マルタンは、『シエクル』への通信のなかでそれをこう特徴づけた。

「来年開催される予定の国際労働者大会の議案を構成する諸問題の選択の決定に現われた視野の広さと、高い道徳的、政治的および経済的な見解とは、ヨーロッパの進歩、正義、自由の友すべての共感を等しく呼ぶであろう。」<sup>30</sup>

他にもマルクスの論説に基づいて叙述を変更したり注を追加したように思われる箇所が若干存在するが、その検討はここでは割愛する。

さらに、もう1点、252ページにおける脚注の追加がある。これについては節を改めて見る。

## III 「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」の異文

カウフマンは252ページに新たな脚注を追加した。前節(1)での247ページでの引用に続くものである。マルクス論文の次の部分からの直接引用である<sup>31</sup>。

In reality, the social democratic working-men's parties organized on more or less national

<sup>28</sup> MEGA<sup>2</sup> I/25, S. 151(邦訳は同前, 村田訳).

<sup>29</sup> Kaufmann, *ibid.*, p. 250, footnote.

<sup>30</sup> MEGA<sup>2</sup> I/25, S. 152; Henri Martin, L'Association Internationale des Travailleurs, *Le Siècle*, No. 11 171, Paris 14. octobre 1865; MEGA<sup>2</sup> I/25, Apparat, S. 723 (邦訳は同前).

<sup>31</sup> 「マルクスがモーリッツ・カウフマンに彼の論文『ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史』を送ったことは明らかである」と言えるのは、前節で見た点にもまして、カウフマンの著書にマルクスの論文からのこの直接引用があるからである。

dimensions, in Germany, Switzerland, Denmark, Portugal, Italy, Belgium, Holland, and the United States of America, form as many international groups, no longer single sections thinly scattered through different countries and held together by an eccentric General Council, but the working masses themselves in continuous, active, direct intercourse, cemented by exchange of thought, mutual services, and common aspiration.

After the fall of the Paris Commune, all working class organization in France was of course temporarily broken, but is now in an incipient state of reforming. On the other hand, despite all political and social obstacles, the Slavs, chiefly in Poland, Bohemia, and Russia, participate at present in this international movement to an extent not to be foreseen by the most sanguine in 1872. Thus, instead of dying out, the International did only pass from its first period of incubation to a higher one where its already original tendencies have in part become realities. In the course of its progressive development, it will yet have to undergo many a change, before the last chapter of its history can be written. ([ところが、ジョージ・ハウエル君は、島国の「俗物」という高貴な立場から、インタナショナルは「失敗」であったし、消えうせてしまったと、『ナインティーンズ・センチュリ』の「教養ある人々」に打ち明ける。] 実際には、ドイツ、スイス、デンマーク、ポルトガル、イタリア、ベルギー、オランダ、そしてアメリカ合衆国に、多かれ少なかれ国民的な規模で組

織されているもろもろの社会民主主義的労働者党は、それぞれがインタナショナルのグループなのであって、ただそれらはもはや、さまざまな国にまばらに散らばった個々の支部が、中心からはずれた場所に有る総評議会によって一つにまとめられているのではなくて、思想の交換、相互援助、共通の願望によってしっかりと結束を固めた、不断の、積極的な、直接の交流のうちにある労働者大衆それ自身なのである。

パリ・コミューンが倒れたのち、フランスの労働者組織はすべて、当然に一時的に破壊されたが、いまではそれは再建の緒についている。他方、現在では、スラヴ人、主としてポーランド、ベーメンおよびロシアにおけるスラヴ人が、あらゆる政治的および社会的障害を押しきって、1872年にはどんな楽観的な人も予見しえなかった規模で国際的な運動に参加している。だから、インタナショナルは死滅したのではなく、その第一期の孵化期から、そのより高い時期、はじめはたんなる傾向であったものがすでに部分的に現実となった時期に、移行したにすぎない。インタナショナルは、その歴史の最後の一章が書けるようになるまでには、前進的発展の過程で、今後もお多くの変化を経験しなければならないであろう。) <sup>32</sup>

注目すべきは、この部分の章句が、カウフマンの著作 <sup>33</sup> においては、多少異なっている点である。

新メガでは、マルクスの現存しない自筆原稿を **X'**、その雑誌掲載本文を **J'** と略記し、本文

<sup>32</sup> MEGA<sup>2</sup> I/25, S. 157. 邦訳は同前、村田訳、150/151ページ。[ ] 内は橋本による追加引用。

<sup>33</sup> Kaufmann, *ibid.*, p. 252, footnote.

の系統を  $X'—J'$  と記載している。これに倣って、カウフマンの著作『ユートピア』第XIV章の脚注に新たに収録されたマルクス論説からの直接引用部分を  $d^K$  と表示すれば、本文の系統は  $X'—J'—d^K$  と続くことになる。

引用箇所について、この記号を用いて、マルクスの雑誌論説の本文とカウフマンの著作における直接引用との相違を記載すれば、次のようになる(各行頭の数字は MEGA<sup>2</sup> I/25のページ数と行数とである。)

- 157.19-20 the social democratic working-men's parties ]  
 $d^K$  the social democratic working-men's parties<sub>2</sub>  
 157.20-22 on more or less national dimensions in Germany,  
 Switzerland, Denmark, Portugal, Italy, Belgium,  
 Holland, and the United States of America ]  
 $d^K$  on a more or less national scale in Germany,  
 Switzerland, Denmark, Portugal, Italy, Belgium,  
 Holland, Hungary, and the United States of America  
 157.23 through different countries ]  $d^K$  through different  
 countries<sub>2</sub>  
 157.24 the working masses themselves ]  $d^K$  the working  
 masses themselves<sub>2</sub>  
 157.25 cemented by exchange of thought ]  $d^K$  cemented  
 by sameness of struggle, exchange of thought  
 157.27 all working class ]  $d^K$  all working-class  
 157.29 reforming ]  $d^K$  re-forming  
 157.33 its first period of incubation ]  $d^K$  its period of  
 incubation  
 157.33 its already original ]  $d^K$  its original  
 157.35 many a change<sub>2</sub> ]  $d^K$  many a change  
 157.36 can be written ]  $d^K$  can be told

見られるように、新メガのページおよび行で示せば157.20-22, 25, 33などの相違は著者本人のマルクスでなければ通常は訂正し得ないような変更である。なぜこのような変更が生じたのか。マルクスがカウフマンに送った雑誌(ないしはその抜刷)にマルクスがそのような訂正を施しており、カウフマンがそれに従ったために生じたという可能性は否定し難いのではなからうか。そのようにしてマルクスが訂正を施して

カウフマンに送った雑誌『セキュラー・クロニクル』(ないしはそれに掲載されたマルクス論文の抜刷)の本文を  $J'^M$  と表記するならば、本文の系統は、新メガが述べる  $X'—J'$  だけでは終わらずに、 $X'—J'—J'^M—d^K$  と続くことになる。もしそうであるとすれば、カウフマンの著作における直接引用はマルクスによる訂正をそのまま反映したマルクス論説の異文だということになるであろう。

#### IV 『共産党宣言』からの引用

アンドレアスもすでに指摘している通り、カウフマンはその雑誌連載および著作において、『共産党宣言』の著名な最終章句「万国のプロレタリア、団結せよ!」の直前に置かれた段落から、二度にわたって英訳し引用している。本節ではこの英訳を検討する。雑誌連載も著作もほぼ同文であり、ここでの要点は相違ではない。

##### (1) カウフマンによる英訳

カウフマンによる一度目の引用は次のようである。

In one of his manifestoes he acknowledges,  
 “Our objects can only be attained by a violent  
 subversion of the social order.”<sup>34</sup>

二度目の引用は、段落全体にわたり、同じ原独文でも一度目とは多少英訳が異なっている。カウフマンは、マルクスの1840年代の活動を、エンゲルスの『イギリスにおける労働階級の状態』とともに紹介し、『宣言』が二人の協同によって刊行されたことを記す。その『宣言』はこう結論しているとして、以下の直接引用が置

<sup>34</sup> *The Leisure Hour*, No. 1407, 14. December 1878, p. 788/II; Kaufmann, *ibid.*, p. 226.

かれている。

“Communists discard the idea of concealing their views and intentions. They declare it openly that their objects can only be attained by means of a violent subversion of existing social order. Let the ruling classes tremble before the Communistic Revolution! The Proletarians have nothing to lose in it but their chains. They may win a whole world. Proletarians of all countries unite yourselves!”<sup>35</sup>

1878年以前のほぼ全文にわたる英訳は1850年にヘレン・マクファーレンが『レッド・リパブリカン』において行ったもののみであり、相当する箇所は次のようであった。

The Communists disdain to conceal their opinions and ends. They openly declare, that these ends can be attained only by the overthrow of all hitherto existing social arrangements. Let the ruling classes tremble at a Communist Revolution. The Proletarians have nothing to lose in it save their chains. They will gain a World. Let the Proletarians of all countries unite!<sup>36</sup>

一見してまったく別の訳文であることが分かる。カウフマンの英訳は自ら訳出したものであろう。この時期にこの章句の別の英訳がなされていることがまず確認されるべきであ

る。

## (2) 英訳箇所に関わる諸問題

この箇所がそのようにしてとりわけ問題となる事情があった。この年の5月11日、ヴィルヘルム I 世に対する暗殺が企てられた。これを口実として、ビスマルクがいわゆる例外法または社会主義者取締法(公共に危害を及ぼす社会民主党の志向を取り締まる法律)を帝国議会に上程する。5月24日の国会では251票対57票で否決される。6月2日の二度目の暗殺の企てを口実に、6月11日にビスマルクは帝国議会を解散する。7月30日の選挙を経て、彼に従順な国会多数派が形成される。9月16日に再び討議が開始された同法案は、10月19日に議会で採択、10月21日に発効する<sup>37</sup>。

9月16日の討議においてプロイセン内相ボート・オイレンブルクは、当時の「ドイツ社会民主党の強力説」を証明しようと3点の引用を行った。

マルクスは直ちに「社会主義者取締法にかんする帝国議会討論の概要」を作成——結局公表はされなかったが<sup>38</sup>——し、それらの箇所について批判を加えた。カウフマンとの手紙のやり取りの前月のことである。その第1の引用箇所への批判にはこうある。

「さてオイレンブルク氏は社会民主主義の

<sup>35</sup> Kaufmann, *ibid.*, p. 229. なお、この箇所に相当する原独文、邦訳、1888年のエンゲルス校閲サミュエル・ムーアによる英訳は、それぞれ次の箇所にある。*Manifest der Kommunistischen Partei*, London 1848, S. 23; *MEW*, Bd. 4, S. 493. マルクス / エンゲルス (服部文男 訳) 『共産党宣言／共産主義の原理』(新日本出版社、1998年) 109ページ。Marx, Karl / Engels, Frederick, *Manifesto of the Communist Party*, London 1888, p. 31; *Karl Marx / Frederick Engels Collected Works*, vol. 6, Moscow 1976, p. 519. 雑誌連載本文は次のよう。2点(語順とコンマの有無)でのみ異なる。1) The Proletarians have nothing but their chains to lose in it. 2) Proletarians of all countries, unite yourselves! (*The Leisure Hour*, p. 789/1)

<sup>36</sup> *The Red Republican*, p. 190/III; *MEGA*<sup>2</sup> I/10, S. 628. 著者名を隠した1869年のステップニーの抄訳もIIまでで、この箇所まではなされなかった (Andréas, *ibid.*, p. 47)。

<sup>37</sup> ここでの社会主義者取締法に関する事実はおそらく *MEW*, Bd. 34, Anm. 151, 445, 446から。

<sup>38</sup> *MEW*, Bd. 34, Anm. 577.

強力説 (Gewaltlehren) を三つの引用文によって証明する。

1. マルクスは資本を論じた彼の著作のなかで言っている。「われわれの目的は、うんぬん。」 {しかし「われわれの」目的と言われているのは、ドイツ社会民主党の名においてではなく、共産党の名においてなのだ。} この箇所は、1867年に出版された『資本論』のなかにはなく、「1847年」に出版されていた『共産党宣言』のなかにある<sup>[583]</sup>、したがって、「ドイツ社会民主党」が現実形成されたときよりも20年前のことである。<sup>[39]</sup>

マルクスの批判の主旨はもっぱら、目的設定をしている主体がまるで別の団体であるという点にある。引用されているのは、1848年の『共産党宣言』で述べられている目的であり、現在のドイツ社会民主党の目的ではない。その結党より20年も前に共産党の名において出された『宣言』の目的には現在のドイツ社会民主党はなんの責任もない、というのである。

このことを前提としたうえで、確認したいのは、また別のところにある。まず、『宣言』の「この箇所」を特定する必要があるが、それについて、『著作集』同巻の注記583の箇所特定はこうである。

「ここで問題にされているのは『共産党宣言』中の次のような箇所である。「共産主義者は彼らの目的がこれまでの全社会秩序の強力的な転覆 (gewaltsamer Umsturz) によってしか達成されえないことを公然と宣言する。」」

この章句の特定は妥当であると思われる。したがって、まさにカウフマンが英訳して引用し

ている箇所だということになる。ひと月前にオイレンブルクが持ち出した『宣言』の一節であるだけに、マルクスの記憶には強く残っていた箇所であるとみてよい。

オイレンブルクから受けた「強力説 (Gewaltlehren)」という批判との関連では、とりわけ『宣言』の文中の gewaltsamer Umsturz という言葉が問題となる。gewaltsam の語義は種々であり、邦訳ではこれまでさまざまな訳語があてられてきた。1888年のエンゲルス校閲のサミュエル・ムーアによる英語訳では the forcible overthrow という語が用いられている。1850年のマクファーレン訳では単に the overthrow とされているだけである。それに対して、カウフマンは a violent subversion と訳している。

これまでの行論でも明らかのように、マルクスがカウフマンから送付された校正刷を点検した際に、もしこの violent subversion という英訳にマルクスが違和感を感じたとするならば、マルクスはその訂正を「助言」することも可能な状況にあったはずである。gewaltsamer Umsturz という語は、カウフマンの訳した a violent subversion では相応しくなく、例えば後の時点での訳語ではあるがエンゲルス校閲ムーア訳のように the forcible overthrow という語があてられるべきであると書き送ることもできたわけである。にもかかわらず、先の手紙においてマルクスはそうした文面を記してはいない。

確かにマルクスは手紙で「校正刷のなかで、二箇所の誤りを指摘するのにとどめました。もっと重要な誤記に立ち入るのには、余暇がありませんし、またそうすることは貴下の目的にそわ

<sup>39</sup> カール・マルクス「[社会主義者取締法にかんする [1878年9月16日および17日の] 帝国議会討論の概要]」MEW, Bd. 34, S. 499. 下線は原文のもの。邦訳は川口浩 訳、萩原直 統一。



ないでしょうから」と書いていた。この箇所は「もっと重要な誤記」に類する部分であったからなのであろうか。あるいはその余暇がなかったためなのであろうか。

いずれにせよ、『宣言』のこの章句において、カウフマンが独語 *gewaltsam* を英語 *violent* と訳している点をマルクスは看過したという事実が確認されるのである<sup>40</sup>。

こうした作業によって、1848年革命の前夜の『共産党宣言』起草当時の諸用語の語義をより正確に知ることは非常に大事なことである。

## お わ り に

まず、本稿において明らかとなった諸点をまとめよう。

第一に、マルクスが直接に指示したラサールとメーリングに関わる二つの抹消部および『資本論』ロシア語訳の付加は、カウフマンによってすべて受け容れられ、採用され、著作にそのまま生かされた。

第二に、送られたマルクスの論文「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」はカウフマンによって利用され、インタナショナルに関わる事実を正確に叙述するのに役立った。

第三に、カウフマンによるマルクス論文「ジョージ・ハウエル君の国際労働者協会の歴史」の最後の二段落の直接引用は、マルクス論文の異文と見得る章句である可能性が指摘された。マルクスの当初の論文と異なった表現が見出されるのであり、その異なる用語は、カウフマンが誤

記したというよりは、著者のマルクス自身でなければ改変し得ないと思われるものだからである。

第四。カウフマンの著書には『共産党宣言』からの引用があった。最後の著名なスローガンに直接先立つ一段落の英文である。この時点までに存在したほぼ全文にわたる英訳は1850年に『レッド・リパブリカン』に掲載されたヘレン・マクファーレンのものしかないが、その該当箇所と比べるとまったく違った英文である。おそらくカウフマン自身による翻訳である。この事実はすでにアンドレアスが指摘しているが、これをまず追試した。さらに、内容に関わるところでは、*gewaltsam* の英訳語に着目し、マルクス自身それを *violent* とすることに異議を唱えていないことが見出された。このことは、1848年革命前夜である1848年2月時点での『共産党宣言』起草当時の状況をより正確に知る点で非常に大事な事実認識となるであろう。

本稿では、以上四つの事実認識を得た。

次に、今後検討されるべき課題を記す。少なくとも二つあるであろう。

本稿で検討したカウフマンの著作は、前述の通り、マルクスが、ドイツ社会主義との彼の関係を通じて、どのようにしてイギリスにおいて知られるようになったかの典型的な例とされている。なぜこのような著作が書かれるようになったのか。カウフマンは序文にこう書いている。「現代社会主義の突然の発展において引き起こされる特別の関心は最近のドイツにおける発展に負っており、著者をして考えをまとめさせる

<sup>40</sup> この箇所の独語 *gewaltsam* は、エンゲルスが校閲したローラ・ラファルグによる1894年の仏訳においては *violent* (Karl Marx – Friedrich Engels, *Manifesto del Partito Comunista*, Milano 1998, p. 99), また1902年のアントニオ・ラブリオーラによるイタリア語訳においては *violento* (Karl Marx – Friedrich Engels, *Manifeste du Parti Communiste*, Paris 1999, p. 97) とされているようである。

気にさせた……」<sup>41</sup>、と。このような現代社会主義の突然の最近のドイツにおける発展は、当然にもドイツにおいて当局の抑圧を生む。イギリスでの関心の高まりは、ロンドンの同年9月17日付の『デイリー・ニューズ』紙や『スタンダード』紙における社会主義者取締法の帝国議会における審議の新聞報道とも密接に関連しているであろう。本稿で見たカウフマンへのマルクスの助力も自らの伝記的事実および理論の紹介と普及とは、この審議において、1848年に『宣言』を刊行した共産主義者同盟と当時のドイツ社会民主党とが混同されることを避けるのに資することを期待していたとも考えられるのである。そのような社会主義者取締法の帝国議会における審議との連関の検討が重要となる<sup>42</sup>。運動史的分析視角が必要とされるであろう。

また、第二に、このような英語文献でのマルクスおよびその思想と活動の紹介の結果、次第に数を増すそれら英語文献を介して日本へ広く導入されるに至るのであり、この関係の検討が不可避となる。普及史・影響史の観点が必要とされるであろう。

とはいえ、本稿の目的とするところは、カウフマンの著作へのマルクスの助言の結果を確認するところにあつたのであって、上記二課題の検討は他日を期したい。

最後に、カウフマン宛のマルクスの第二の手紙で触れられ、その手紙の翌日10月11日に郵送された可能性も否定できないエンゲルスの著作『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』がカウフマンの著作に利用されたのか否かの問題に触れておきたい。送付されたかどうかの吟味

も必要であろうが、結論から言えば、送付されたと仮定したとしても、利用はされなかったものと見られる。というのは、最も関係があると思われるユートピア社会主義の3名（サン・シモン、フーリエ、オウエン）の叙述について、雑誌掲載稿と著作とを比べてみると、無論、句読点の相違や有無、大文字・小文字の相違、イタリックか否か、ハイフン・引用符の有無、数字の表記法の相違、行替えの変更といった形式的な相違は存在するものの、エンゲルスの著作の影響を受けて変更されたと思われる内容的な相違を含む箇所は存在しないからである。

【付記】本稿は2011年度科学研究費補助金・基盤研究(B)研究課題名「西洋社会経済思想翻訳術語の生成と日中『共産党宣言』翻訳史に見るその展開の比較研究」研究代表者：大村泉（課題番号50137395）および基盤研究(C)研究課題名「『共産党宣言』の起草者名の普及史」研究代表者：橋本直樹（課題番号21530182）の研究成果の一部である。

<sup>41</sup> Kaufmann, *ibid.*, p. v.

<sup>42</sup> 1878年時点の諸情勢における friedlich, unfriedlich, gesetzlich, gewaltsam 等の関連、特に „gesetzliche“ Gewalt の検討ということになろうか。